

経済論議、私の読み方

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

長いあいだ日本経済を悩ませてきたデフレを脱却しようと異次元の金融緩和をはじめいろいろな政策がとられるようになった。それとともに政策の適否や有効性について経済学者を含めて多くのエコノミストが論陣を張っている。これほどにぎやかな時は久しぶりだ。

ところが、経済の見方に自信のない私のような者は経済論議に正反対の見方が存在していることに少々当惑している。本屋でもその手の両論の本が覇を競うがごとく山積みされている。

困った私はある論客にたずねてみた。リフレ派と反リフレ派あるいは楽観派と悲観派はなぜ対立するのか、中立的立場で教えて欲しいと。

いわく、リフレ派は可能性のある限りそれを追求していく価値があるとする。デフレ脱却も思い切って挑戦しなかったから、その無策や不徹底が停滞を招いた。そのやる気が国民の期待に働きかけるのだ。それは可能性が高い。万一、副作用ができればその段階で適切に対応すればよい。他方、反リフレ派は成熟化後の経済社会においては無理な人為的な施策は効果がないばかりか、副作用が大きく、かえって新しい困難な事態を生み出すおそれが強い。節度を越えた施策は不均衡を作り出すもととなり、取り返しのつかない副作用に苦しめられることとなる。

こうしてみると「両陣営」とともにもっともな論拠をもっているように見える。しかし、よくよく考えてみると経済理論というよりはその根底に論者の実感からくる価値観や人生観のようなものが投影されているような気がする。だから噛み合わないわけだ。

また両論には微妙に時間的視野の違いも見てとれる。前者は短期、後者は中長期を主として対象に取り上げる傾向がある。

現実の経済の動きは複雑で不確実である。一人ひとりの考えや期待値も違うし、置かれてい

る立場たとえば若者か高齢者か、また所得の多寡によっても異なる。だから経済理論でこうなれば当然こうなる、過去のデータではこうだ、海外の事例ではこうだと決めつけられると、将来を見越して戦略を考えようとしている企業家や投資家にとっては危険な賭けに出る誘引となる。どうなるかわからないのが現代成熟社会だ。

まして現代は経済のグローバル化が進み、海外の景気や思いがけない出来事がわが国に大きな影響を及ぼすことがある。そうなる前提が変ってくるので、断定調の経済論議の中にも条件付のいわゆる「～したら」とか「～すれば」の世界が隠れているとみて読んだほうがいい。条件を取って書き込んでいないから力強く断定的に見えているのだと考える。

他方、解説調の経済論議は例えば「賃金が上昇すれば」などの条件の部分指摘して議論を深めようとしていると読む。これは必ずしも結論を逃がっているわけではない。むしろ何を条件として強調しているかに注目すれば興味深い。

賃金上昇や為替レートの動向を当面最重要条件と見るもの、さらに国債市場をはじめとした金利の動き、中長期的な高齢化や労働人口の動向を条件としてあげるものもある。規制緩和や財政再建の取り組みを最も重視するものもある。そうなる単にデフレ脱却という目標達成の問題だけではない広がりをもってくる。そうした意味で丁寧な解説も論理のつながりを見ると大変面白い。

また、金融マーケットの動向に興味のある人、金融機関の関係者、実体経済に関心のある人、さらに消費生活に不安を持つ人では経済論議についての受け止め方も違って来るので、それぞれの読者目線で論調が書かれているか、またそこに意図的な偏りがないかを見極めながら読むこととしている。